

## 共同研究プロジェクト

## メディア・社会心理研究の有機的統合に関する共同研究

## 2014年度活動報告

佐藤 知久・長崎 励朗

今年度はプロジェクト内で2つの企画を行なった。

まず第一の企画は昨年度から継続しているもので、メディア論や社会心理学を専門とする教員の元指導教官を招いて、各分野の専門的な知見を学ぶという趣旨の研究会である。本年度はメディア論を専門とする京都大学教育学研究科准教授の佐藤卓己氏を招いて、その著作を検討する中で、メディア史の方法論や知見について議論を交わした。そこで扱った著作は佐藤氏が出版した初の単著であり、今年度、筑摩文庫から増補版が刊行された『大衆宣伝の神話』である。この著作はワイマール期のドイツ新聞を主な対象とした研究で、ナチスドイツが登場する土壌となったメディア環境が詳細に検討されている。そのため、手法としては歴史研究ではあっても、ナショナリズム研究や社会心理学とも深く関係しており、参加した本学教員はそれぞれの専門分野にひきつけてメディア論の性質を学ぶことが出来た。当時のドイツ新聞について考えることは、ネイション・ビルディングの過程とメディアの関係性を考えることであると同時に、それは心理的な意味でも『想像の共同体』としての国民国家が確立していく過程を追うことにもなるからだ。2014年はイスラム国やスコットランド独立といった国民国家体制の揺らぎが大きくクローズアップされた年であったこともあり、非常にタイムリーな企画であったといえる。本プロジェクトの趣旨に則った有意義な企画であったと言える。

第二の企画として、福島県南相馬市にある映画館「朝日座」についての映画『ASAHIZA 人間は、どこへ行く』（監督：藤井光、製作：

ASAHIZA 製作委員会、2013年）の上映会（人間学研究所公開イベントとして実施）を行うとともに、監督である藤井光氏を交えたディスカッションの場を設けた。

この映画は、すでに閉館した映画館の想い出を語る地域住民のドキュメンタリーである。そして、映画製作に被災地の住民自身がかかわっていること、またこの映画を見る立場にいる被災地外の人たちが、この映画の途中経過バージョンを朝日座で見る場面が含まれていることなどにおいて、きわめてユニークな構造をもっている。

文化人類学や民俗学において「対象を捉え、描く」側がどこに立っているのか、その位置づけが問われてきた状況に呼応するように、ある特定の問題意識を捉えた映像表現・メディア表象においても、イメージの暴力に対してセンシティブであればあるほど、映像を作れなくなっていく状況がある。表象の偏向や部分性を乗り越えるべく展開されるメディア・リテラシー教育も、表象の製作プロセスにあるこうした問題を解決するものではない。YouTube 以後、映像製作の側に誰もが（つまり「当事者」も）参入できる現代の状況下においては、表象の不可能性という問題は以前にもまして真剣に問い直されるべき状況をむかえている。

3.11後の日本において、あえてその困難な状況下における当事者に映像制作技術を教え、当事者そして被当事者をまきこみながら映像作品を創り上げていく試みを続ける藤井氏からは、原発問題を経た現在の福島の状況をめぐる映画・記録が多数作られていくなかで、外部世界に告発する映像が、その内容ゆえに当事者を苦

しめるという状況になっていくという構造があることが、問題意識としてまず示唆された。

また、『ASAHIZA』が「被災地を綺麗に撮りすぎているのでは」という批判に対して藤井氏は、自身を「映像自体を根本的に信じていないタイプ」と評し、映像として現れる「美」は、あくまで技法のうえでの表面的な美としての「効果」と呼ぶべきものであり、映像メディアは単なる「テクノロジー」であるという発想に引き戻したいと述べていた。畢竟カメラは、カメラの前にあるものしか記録できない。藤井氏の作品は、重要なのはまずもってカメラの前に

どのような状況があるのか、地域の人びとをふくめ映像の製作に参加する人たちが、そこにどのような状況をつくりだすことができるかであることを示唆している。

自らの作家性を強調するのではなく、映像創作の過程を多様な参加者／制作者によって組み上げながら活動していく藤井氏の活動は、これからの芸術と社会、今後のメディア表現と社会との関わりを考えるうえで、きわめて重要なヒントとなるものであった。本研究会のディスカッションについては、その詳細を次号の『人間学研究』にて報告する予定である。